研究の概要

研究テーマ「千葉県における古道の調査・研究」

鈴木孝男

1　本研究の目的とその要点

本研究は千葉県を中心として、様々な角度から古道に関する調査・研究を行うことを目指したものである。研究においては以下の 4 点を柱として取り組んだ。

(1)　古道を歩くことにより自分たちが住んでいる地域の歴史や生活文化などを学ぶ。

(2)　参加者間でのコミュニケーションを十分にはかり、お互いが持っている情報の共有や共同研究を行うなどして、研究活動が参加者にとって知的財産の創成になるような活動を行う。

(3)　千葉県を中心に古道歩きのガイドブックのようなものを作って、多くの人に古道歩きを楽しんでもらえるようにすることを目指している。

(4)　将来は行政と組んで、健康寿命長期化のプログラムの一環として利用してもらえるようなウォーキングコースの設置に結びつけられるようにしたい。

ここでいう古道とは

- 今は使われていない古い道（あるいは道の跡）
- 古くから使われているが、現在では主要な道路ではなくなっている道
- 昔も今も主要道路ではないが、人々の暮らしに欠かせない道
- 昔も今も主要道路であるが、バイパスなどの影響で使用頻度が大きく減少している道
- トンネルや橋の建設で使われなくなってしまった、かつての主要道路

というように私達の生活で利用されている道を含めて幅広く捉えて、その活用を中心に研究することにしたのである。

研究においては、2018 年 4 月に「古道歩き研究会」（会長：鈴木孝男）を発足させ、参加してくれた会員（40 人前後）の方々と一緒に古道を調べて歩きながら、古道の持つ価値を確認しようとしたのである。

2　研究活動の概要

活動は月例会を中心に行い、以下の 11 回の例会を実施した。

(1)　4 月 28 日　葛飾大師を歩く（国府台周辺に残る葛飾大師：移し四国霊場）の札所巡り

(2)　6月2日　行徳めぐり（寺町としての行徳で保存されている権現道とその周辺を歩く）

(3)　6 月 30 日　市川市大野周辺に残る平将門関連の史跡巡り

(4)　7 月 28 日　古道歩きに関する勉強会（千葉商科大学、講師鈴木孝男）

(5)　9 月 21 日　「鹿野山神野寺とその周辺」（千葉商科大学、講師豊島大輝氏）

(6) 10 月 27 日　鹿野山古道を歩く：現地の降雨により中止（一部会員が現地を歩く）

(7)　11 月 25 日　鹿野山古道を歩く　神野寺に登る参道を歩く

(8)　12 月 16 日　日光街道千住宿とその周辺を歩く：　浅草～北千住（降雨のため南千住で中断。一部参加者が自主的に北千住まで歩く）

(10)　1 月 19 日　甲州街道と内藤新宿周辺を歩く：半蔵門～新宿

(11)　2 月 23 日　地域志向研究助成金報告会に参加

(12)　3 月 23 日　東海道と品川宿周辺を歩く：北品川～大森海岸

例会で歩いた地域としては、市川市、君津市、東京都台東区・荒川区、東京都千代田区・新宿区、東京都品川区である。また古道と行っても様々な形になっており、地元では古道として認識されてないような道（市川市国府台周辺の葛飾大師関連霊場めぐりの道）もあれば地元で古道として認識してある程度（あるいはかなり）整備されている道（市川市浦安の権現道、品川区の旧東海道）もある。さらにかつては古道として整備されていたが、現在では手入れがなされておらず、かなり荒れた状態になっている道（鹿野山古道）もあった。

古道が地域資源として理解されている場所では道標、地図などが整備され、トイレや公園など実際に歩く人にとって便利な環境が整えられている。特に東海道品川宿は観光地として認知されているようで、他の古道とは別格のレベルになっていた。

一方、都内でも日光街道の千住宿は多少整備が行われているが、歩く人のことを意識した施設にはなっていない。甲州街道においては史跡があっても道標や説明看板など最低限の施設もなく、まさに知る人ぞ知ると言ったレベルである。

さらに君津市の鹿野山に至っては、ボランティアの手でかろうじて倒木の撤去などが行われているが、道が消えかかっているような場所もあり、ガイドに案内をしてもらわないと道に迷ってしまうような場所が多かった。

3　古道歩き参加者からの声

こうした古道を歩いた会員たちがどのような評価をしたかを見ると、地域資源としての古道歩きの価値を理解する上で重要な指摘が示されていて興味深い。

(1)行徳の古道歩き（第 2 回例会）に関するコメント
まず市川の古道歩きに関する会員のコメントを見てみよう。

A さん（男性）

妙典といえば、東西線普通電車が快速通過待ちをする駅といった印象しかなかった私。戸数千軒、寺百軒と呼ばれる寺町であったとは驚きでした。―中略―ウォーキング・観光を楽しむには、遠くへ行くばかりが能ではない。灯台下暗し、地元にこんなにいい所があるんだということを実感させてくれた古道歩きでした。

B さん（女性）

町には木造の古い家も多く残っていた事など、自分の住んでいる町の歴史を大切にしている様子が見られてとても良かったです。

C さん（男性）

キリシタン灯籠のある「妙覚寺」、隠れキリシタンは天草・五島だけと思っていましたら、関東にもあるんですね。常夜灯・田中邸・中台御輿－行徳の歴史・思い等、行徳を愛する田中夫人・中台社長の話は圧巻でした。

ここでは地元の地域の歴史や現在の人々の暮らしについて、初めて知ったことが多くて驚いた、あるいは地域の人々の地域愛に基づく活動に対する感動など新鮮な驚きが示されていて興味深い。よく「身近な地域」という言葉が聞かれるが、居住している場所についての知識を持っている人が少ないことがよくわかる。またそうした地域の歴史や文化、産業などについて知ることの喜びも伝わってくる。

(2)君津市の神野寺古道歩き（第 7 回例会）に関するコメント

D さん（男性）

こうした古道はボランティアの方たちが本当に努力して整備管理しているため維持できていることがよくわかりました。また、日本の山林は戦後に植林されたところが多いが、その後林業が経済的にペイしなくなったので荒れてしまっているとのことを何かで読んだ気がしますが、ガイドの方もおしゃっていたようにこの古道を歩いたとき「なるほど」と思いました。古道歩きで現在の日本の問題点が実感できたと思います。
E さん（女性）

ホテルの屋上からの景色、峠から眺めた景色、古墳、歩いた古道、村の佇まいなど、自然や歴史を体感できる素晴らしい所だと思いました。帰りのバスの中でマザー牧場の沢山の車を見ながら、「もう少し足を伸ばしてごらんなさい。素晴らしい場所がありますよ。」

と宣伝したくなりました。古道は昔の人々や今生活されている方々に少し触れられて面白いです。

F さん（男性）

古道（歩く道）によって違うと思いますが、古道に関する情報を事前にレクチャーしておいていただけると、歩いていても面白く、興味がもてることが多くなるような感じがします。今回の「神野寺古道」は、まさしくそのような進め方に適した古道で、事前の豊島さんのお話（講演）は大変良かったと思います。そして当日のお話もさらにその風景なりを目の当りにしながらで、本当に楽しく歩くことができました。

鹿野山古道は戦前にかなりの参拝者が会った神野寺の参道にあたるもので、かつては多くの参拝者が通る主要道路であったはずである。しかし今は３人の方からのコメントが示しているように歩きにくく、道筋もわかりにくく、ガイドなしでは歩けないような状態になっている。

こうしたかつての主要道路を歩けるようにして外部からの人に歩いてもらうと、地元の人では感じないような感慨や楽しみを見いだすのである。つまり古道を歩けるようにすることで、外部から来た人達が古道の持つ価値を見いだすのである。その場合不可欠なのが、古道に関する情報を歩く人に与えることと、普通の人がハイキング程度の装備と力で歩けるようになっていることである。

私達は冬場においては山歩きを伴う本格的古道はリスクがあるので行かなかった。かわりに歩いたのが大都市内部の古道である。具体的には江戸時代に作られた主要街道の最初の宿場町とその周辺を歩く、と言うコンセプトで、日光街道と千住宿、甲州街道と内藤新宿、東海道と品川宿を歩いた。街道自体は車中心の幹線道路になっていて、そこを歩いても古道歩きの雰囲気を味わうことは難しい。しかし一歩横道に入って歴史を感ずる場所を巡ると、そこには古道歩きに共通する価値が見えてくるのである。

(3)日光街道千住宿とその周辺（第８回）に関するコメント

Ｇさん（男性）　今回最後まで行けなかったことはすこし残念でしたがあの天候では仕方がなかったと思います。時代劇等で吉原や小塚原といった場所はよく出てきますが、どこにあるのかよくわかっていませんでした。

この古道歩きで遊郭は神社や仏閣の付近にあることがなるほどと納得しました。また樋口一葉記念館でみた図面で吉原が堀に囲まれた特殊の場所であったことが理解できました。

投げ込み寺に関しては吉原の遊女の華やかだけど悲惨な生活がなんとなく感じられました。ドラマの「仁」や「赤ひげ」でそうしたシーンが出てきますが、ここで実際にあったことなんだと思いました。

Ｈさん（男性）　江戸時代から明治、大正、昭和の各時代の吉原通いとしての道、小塚原の刑場への道の説明案内を聴きながら、今回の古道歩きを体感させて頂きました。最後になりますが、事前調査が素晴しく、密度の濃い例会でした。有難うございました。

Ｉさん（女性）　次は吉原。そこで私は大きな勘違いをしていたことに気づく。金澤の東廊のように未だ数軒の黒い格子戸の建物が残っていて、その一部が一般客が泊まれる旅館として生き残っているものだとずーっと思っていた。お歯黒溝も遊女達が逃げ出さないように堀があり、今は道路になっているらしいが朱い印でここからが遊郭だよという目印があるのかと思っていた。吉原の遊女と言えば、「生まれては苦界、死しては浄閑寺」と言われていたようだが、私は『人間はすごいな―ベスト・エッセイ集〈’11 年版〉』（文芸春秋社）にある大西峰子さんの「花魁の香木」を思い出さずにはいられない。（女性）

(4) 甲州街道内藤新宿とその周辺に関するコメント

Ｊさん（男性）　新宿ゴールデン街はＴＶなどで名前は知っていましたが、初めて場所がわかりました。15 年ほど前に新宿で２年ほど働いておりましたが、花園神社界隈にはいったことがありませんでした。現在は外国人旅行者も多いとのことですが、当時は少し怪しい場所という感じで何となく夜は避けていた感じです。

Ｋさん（女性）　花園神社 、ゴールデン街　若い頃はこの地域はなんとなく怖くて避けていました。紅テントが張られたことのある広い境内、今回初めてこの地域をあるき、若い頃一度行けば良かったと思いました。（女性）

Ｌさん（男性）　2019 年最初の古道歩きは半蔵門から新宿駅までであった。新宿の名称の由来である内藤新宿とその周辺を歩くことは、20 号線を歩いた経験はあったが興味深いものであった。長野県飯田市生まれの信州人にとって「新宿」は東京を感じる最初の都市であった。鉄道も高速バスも新宿が終着駅。しかし新宿に関する理解はそれほどなかった。

Ｍさん（女性）　新宿歴史博物館の展示物にはまり、面白くて時間を忘れて、ランチの時間が短くなり、皆さんにご迷惑をかけてしまい反省してます。玉川上水四谷水番所の傍で二十代を過ごしたので自分の回想録と重ねあわせて街道を歩き進みました。新宿駅 東口の交差点付近に馬水槽は凛として立っていました。大切に保存してほしいと思いが残りました。

千住においては、吉原や小塚原のような大都市外縁部に置かれた遊郭や処刑場のような「一般の生活には好ましくない施設」があり、そこを歩くことで当時の雰囲気やそこで行われたであろう底辺の人々の生活を感じることができた。様々な歴史を抱える場所ほど、それは今に生きる私達に何らかのメッセージを伝えているのである。私はこれを「場所の持つメッセージ効果」と呼ぶことにする。

内藤新宿では上記の歴史を感ずる場所であると共に、参加者自身の歴史の追体験ができる場所でもあった。ここを歩くことで、かつて青春時代に様々な思い出を作った新宿の街、

信州方面から上京して東京に入る際の入り口として通ってきた新宿駅、社会人になってから仕事で歩き回った四谷周辺など、参加者それぞれが持つ思い出を懐かしむ効果が生じたのである。私はこれを「思い出効果」と呼ぶことにする。

古道歩きは古道に関連する史跡巡りという外観を持ちながら、そこを歩く人々に場所から生じるメッセージや思い出を与えることという効果を当たることが確認できたのである。このように考えると、古道歩きには参加者に与える効用がかなり大きいということが指摘できる。

これを地域資源という観点で見ると、古道歩きはかなり大きな地域資源としての価値があることがわかるであろう。もちろんそれは場所による。人間の活動の積み上げが高ければ高いほど価値が大きくなるし、少ないと効果が少なくなるのはやむをえないことであろう。

一方、鹿野山古道の例で確認したように、かなり価値のある古道でも、それを維持・発展させるためには現代社会における私達のかなりの努力が必要とされるのである。台風や大雨などで古道が土砂や倒木の蓄積で使えなくなっている。また道標がなくなっている場所もかなりあるようだ。これらの道路を守る上での基礎的資源を復活させて、だれでもいつでもと通れる状態にしておくことが求められている。

いくつかの古道において、維持管理をボランティアで行っている例が複数見られた。地元のボランティアの方々が、文字通り手弁当で古道の整備を行い、古道を歩きやすくしてくれているのである。このような地元の方々のご尽力と、古道を歩く私達のような活動とがつながりをもち、ボランティアの方々への敬意を表しながら歩くことで、古道歩きの価値は一層高まることが期待できるのである。

4　本研究から得られたこと

「千葉県における古道の調査・研究」においては、古道そのものを調査研究すると言うよりは、古道が持つ地域資源としての価値や効用についての研究が中心になった。それは実際に「古道歩き研究会」を組織して、会員と共に実際の古道を歩いて、そこから得れた会員の方々からのコメントを集める過程で変化していったものである。単に地図上の古道探しをするのでなく、実地調査を行いながら、古道が持つ価値を探求したのである。

その結果、古道には地域資源として立派に通用する価値があることが確認できた。その1つが小塚原や浄閑寺（吉原の投げ込み寺）に見られるような「場所の持つメッセージ効果」であり、もう1つが新宿や四谷などで示されたような「思い出効果」である。こうした効果は実際にそこに行って歩いてみて、現場に立った人のみが感ずることのできる個人的な感慨であり、古道歩き参加者がそれぞれ異なる形で受け取ることのできる効用である。

これらの価値（効用）を体感するためには、古道をいつでも誰でも利用できるような状態にしておく必要がある。この点についてはボランティアの活動と古道歩きをする人々との連携が重要であることも確認できた。

また、実際に古道を観光資源として活用している事例があることも確認できた。東海道の品川宿は古道歩きの人々を意識した街づくりがかなり進んでいる。また著名な古道である「熊野古道」や中山道の妻籠宿～馬込宿などが海外も含めて多くの観光客を集めるのに成功している例がある。

古道はどこにでもある地域資源であるが、その活用が遅れている（あるいはほとんど手つかずの状態）になっているとこともある。むしろ手つかずになっている古道のほうが圧倒的に多いのが現状であろう。こうした古道間の格差をどう考えるのかは、それぞれの地域の自治体や住民に課せられた課題である。

古道には外部からの人の呼び込みという効果の他に、その地域に住んでいる住民にとっての「健康増進効果」が期待されている。高齢化が益々進む中で、シニア世代の健康寿命の長期化を実現する手段として、古道歩きを活用することは大きな効果を生むことが期待できる。

今後、人口減少や地域間格差の拡大など、地方を取り巻く環境が厳しさを増す状況の中で、ほとんどすべての地域に存在する古道について、「いつでもだれでも利用可能な古道づくり」をコンセプトにした地域活性化策の検討が求められている。